

**「大妻女子大学人間生活文化研究所の研究と歴史」
P103～113より抜粋**

『大妻女子大学人間生活文化研究所の研究と歴史』，
大妻女子大学人間生活文化研究所，
2019，
<https://www.ihcs.otsuma.ac.jp/ebook/book.php?id=63>
(参照 2020-06-09)

1. オンラインジャーナル「人間生活文化研究：International Journal of Human Culture Studies」の発行（2012—）

『人間生活文化研究』は、2012年の創刊以来、「人間の生活と文化」に関わる250編以上の研究論文を迅速に掲載し、オンラインジャーナルとして世界に発信し続けている。

多様で広範囲にわたる領域の論文を受け付けており、投稿資格と字数に制限もないことから、年々論文投稿数は増加傾向にある。特に、査読付き論文の

投稿は、大妻女子大学内のみならず、他大学からも増えている。

2012年6月から2018年12月までの査読付き論文「原著論文」「短報」、査読なし論文「総説」「報告」「資料」の論文採択率と投稿受付から掲載決定までの平均期間は下記の通りとなった。

	採択率	平均期間
査読付き論文 原著論文・短報	62.9%	114.0
査読なし論文 総説・報告・資料	92.3%	16.7

すべての論文は、人間生活文化研究のホームページから閲覧することができるが、査読付き論文は、国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）のプラットフォーム、J-STAGEでも公開している。J-STAGE

は、世界中の論文検索エンジンとリンクをしているため、より多くの読者を獲得することが可能となる。

今後も研究成果の発表の場として活用できるよう、多くの研究者からの論文投稿を募集している。

<http://journal.otsuma.ac.jp/>

<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/hcs/-char/ja/>



オンラインジャーナルの未来について —研究所オンラインジャーナル投稿者の一人として—

大澤 崇人 日本原子力研究開発機構物質科学研究センター 主任研究員

筆者は大妻女子大学人間生活文化研究が立ち上げたInternational Journal of Human Culture Studiesの創刊に投稿した1人としてこのエッセーを書いている。ややこの雑誌の本流からは外れた分野の研究者であるが、このような総合性の高い雑誌から生まれてくる独創的な研究もあると思う。

現在、研究者が自分の研究成果を発表する形態としては、主に3つある。1つは学会発表、1つは著書、そしてもう1つは学術雑誌である。その他にも特許、ホームページ、プレス発表、補助金等の報告書、大学の紀要、講演などが挙げられるが、学術雑誌への掲載が最も主要な研究成果発表の形態であると広く認知されている。その理由は、学術雑誌の多くが採用している査読制度に根拠があり、専門家の査読を通過した論文だけが掲載されるため、ある一定以上の学術的品質が保証されているためである。学術的に価値がない論文や、致命的で修正不能な誤謬を含む論文は掲載を却下されることになっている。現状で最も権威があると考えられている総合学術雑誌のNature誌やScience誌では投稿された論文のほとんどが査読に回されることなく、エディターの判断で却下されてしまう。こうした厳しい通過儀礼のおかげで学術雑誌の権威と格式は維持されているのである。しかし、こうした学術雑誌の様式が確立されたのはそれほど古いことではない。私は博士論文を書く際に19世紀以前の文献も多く収集していたのだが、19世紀のNature誌が現在とは全く異なる紙面構成であることを知って驚かされた。そこには査読制度と思しき制度の片鱗すらなく、現在で言うところの科学雑誌Newtonのような雑誌だったのである。

査読制度についてもう少しだけ触れることにしよう。

査読制度は現在では研究者の間では当然あるべきイニシエーションとして認知されているが、歴史上最も偉大な発見の多くが査読制度の洗礼を受けていないことは重要である。例えば、ワトソンとクリックによるDNAの螺旋構造についての、あの有名すぎる極めて短い論文は査読を通過していない(Nature 171, 737-738 (1953))。また1905年に発表されたアインシュタインの特殊相対論などの偉大な論文も査読されることなく発表されている(Annalen der Physik (Leipzig) 322 (10): 891-921.(1905))。もっと遡れば、例えばニュートンが完成させた古典力学は、所謂プリンキピア(Philosophiae Naturalis Principia Mathematica (1687))という著書によって発表されており、当然ながら査読など存在しない。このように査読なしで発表された偉大な業績は枚挙に暇がないが、査読制度が確立された背景にはそれなりの妥当性があることも確かだ。査読制度の最初の記録は1665年のロンドン王立協会のPhilosophical Transactions of the Royal Society誌の創設者であるヘンリー・オルデンブルクによる記録であり、最初の査読出版物は、エジンバラ王立協会によって1731年に出版されたMedical Essays and Observationsとされている。しかしながらこうした査読制度は長い間広く浸透することなく、現在のシステムが確立したのは前世紀中葉に過ぎない。現在の査読制度は、極端に品質の劣った論文を掲載から弾く、学術雑誌の品質管理システムとしてはある程度有効に働いていることは確かであり、少なくとも半世紀間に渡って学術雑誌界に最も定着した、実質的標準規格である。そのデメリットについても散々指摘され、議論されてきたにもかかわらず、今のところ査読制度が大きく傾く気配はない。

しかしながら、この15年間で科学雑誌の形態は全く様変わりしたとも言える。すなわちデータの電子化、オンライン化である。主要な学術雑誌はほぼ全て電子化され、オンラインで閲覧可能になった。おかげで図書館で論文をコピーする機会はほとんどなくなってしまった。10年くらい前までは古い雑誌は紙媒体しかなかったため仕方なくコピーしていたのだが、近頃ではどの学術雑誌も創刊号から全て電子化されているため、紙の雑誌を見る機会は激減した。コピーを強いられるのは図書館が当該雑誌の購読を停止してオンラインジャーナルにアクセスできない時だけである。どこの学会誌も紙媒体を廃止してコストを削減することに躍起になっており、紙の雑誌が完全に消滅するのも時間の問題かもしれない。よって、「オンラインジャーナルの将来はどうなりますか」と問われたら、オンラインじゃない雑誌ってあるのですか、と問い返すべきであろう。そういう時代に私達は生きている。しかし勘違いすべきでない点は、学術雑誌の電子化・オンライン化は紙媒体からの脱却という次元の些末な話ではない。これは学問の根本的な刷新につながる出来事なのである。

媒体（メディア）と情報は常に一体である。媒体なき情報はありえず、情報なき媒体は空虚である。現在の科学技術レベルから言えば、ある人間の思惟の中身は他人から見ればブラックボックスなのであって、その情報はある人間の脳内という共有不可能な内部ストレージに格納されている。そこにどんな偉大な理論が眠っていようと、それを他者が認識できる何らかの媒体上の情報に変換されなければ、その情報は他人からは永遠に未知である。しかし思惟の内容を口伝で伝えるのと紙の上の文字として表現するのでは根本的に違いがある。口伝では大量の情報を正確に伝播させることは難しいだろうし、それこそ伝弟子で多聞第一のアーナンダや稗田阿礼のような人間がいなくなってしまうと、情報量は極端に減少してしまうかもしれない。しかし、情報媒体の転換によるもっと決定的な変化は、情報そのものが媒体に最適化されるように変換されるという点である。例えば、口伝で伝えられる情報の多くは詩や歌の形態に変換されるのである。詩や歌は、人間が丸暗記しやすいように最適化された情報伝達形式である。古代の文学がほとんど韻文であることは、この法則を如実に証明している。漢詩、パリー

語の仏典、コーランなど、全て韻文であり歌であった。和歌にしても、それを書写することが想定されていなかったことは明らかである。詩と歌は訓読みとともに「ウタ」であり、大和言葉で「ウタ」は詩と歌の両者を包含した概念である。メロディーがあれば歌詞を覚えられるが、メロディーがないと途端に記憶しづらくなるのだ。しかし文字が登場し、その媒体が竹簡や紙へ移行すれば、情報自体がそれに合わせて変化していくのである。具体的に言えば、紙の上の文字であれば韻を踏む必要がなくなり、散文が主体になっていくのである。我々が普段目にする文章のほとんどが散文である理由は、文字が発明され、紙などの媒体が発明されたため、口伝で情報を伝播させる必要性がなくなったからなのである。新聞の記事を丸暗記する人間などほとんどいないし、する必要がない。

学術雑誌の電子化・オンライン化へ話を戻そう。電子的な情報が紙媒体の代替程度にしか思っていない諸氏も多かろうが、本質的にはそうではない。単に紙をスキャンしてpdf化しただけなら、それは紙の変形に過ぎないが、これでは本質を見ていないことになる。電子化・オンライン化はIT技術と直結していることは言うまでもないが、ここで実装されている技術の核心の一つは、ハイパーテキストという、半世紀前に発明されたシステムである。これは現在のインターネット技術の根幹を成している技術で、ハイパーリンクと呼ばれる参照情報によって複数のテキストを有機的に接続できるのである。

媒体とは逆説的には制約の謂である。口伝では物体の形態を正確に表現できないし、白黒印刷では色を再現できない。よって、新たな媒体の発明は制約からの解放である。人類が文字、紙、印刷技術の3つの発明によって、どれほど情動的制約から解放されたかは誰の目にも明らかである。しかし、情報の電子化・オンライン化の衝撃はそれらの比ではない。情動的制約が、途方もない次元で解放されているのである。全ての参考文献はハイパーリンクで接続され、一瞬で全ての情報にアクセスできる。接続できるのはテキストだけではない。画像だろうと動画だろうと音声だろうと測定データだろうと、電子化できる全ての情報を有機的に接続可能ということである。立体的な物体の形態をCAD（Computer Aided Design）データとして提供したり、調査したフィールドの様子をバーチャルリアリティによって読者

に提供したりもできるだろう。こうした無限の拡張性によって、文字が情報の主権を失ってもおかしくないとさえ思うのである。例えば、論文（という言葉さえ適切性を欠くかもしれないが）の主体がプログラムそのもので、そこから従属的なテキストやデータにリンクが貼られている、という形態にだって進化しえる可能性がある。

学術雑誌の電子化・オンライン化は読者層にも決定的な変化をもたらす。オープンアクセスジャーナルであれば、世界中誰でも自由に学術論文を閲覧できる。この革新性は改めて説明する必要もないだろう。また学術雑誌の電子化・オンライン化は査読制度の根本的な革新にも大きな役割を果たすだろう。残念ながら現在は紙媒体時代の呪縛に倣って、これまでと全く同じ査読方式がオンラインで行われているだけであるが、雑誌編集者がオンライン化の本当の可能性に気付いたならば、おそらく査読制度にも大きな変革がなされるだろう。著者、査読者、編集者といった数人の密室で行われてきた査読過程は、オンライン化によって完全に公開することも可能である。さらに未来に目を向ければ、こんな生半可な話ではなく、人工知能（AI）によって査読を行うことも考えられる。そうすると、今度はAIが論文を作成し、AIが査読し、AIがそれを読む、という人間不在の学術雑誌（もはや雑誌ですらないだろうが）になっていく可能性すらある。学問は既に、その範疇に人間の主体性がどの程度存在すべきかどうか、という議論にまで進む時代に突入しつつある。これはもう絵空事ではない。文章の剽窃を検出するチェックツールが登場して久しいのであるから、査読がAIによって行われても何の不思議もない。

雑誌の形態そのものも紙媒体の呪縛から解放されることで、全く新しい形態へと変化でき、ビジネスモデルもどんどん多様化していくことになる。これまでのように著者が掲載料や別刷代を払ったり、会員から学会費を徴収することで運営されていたビジネスモデルも変革されていくことになるだろう。オンライン化することで、ホームページに広告を掲載してアフィリエイト報酬を稼いだり、論文の掲載に留まらない様々なオンラインサービスを同時に提供することで副収入を得る道も開かれている。過去の因習や既成概念に固執しないならば、たとえ学術雑誌であろうともその方向性には無限の可能性が開かれている。

時代は必ず流れ行くものであり、技術の進化はそれを押し止めることはできない。しかしそれをすぐに受け入れられるほど人間は柔軟ではないし、一度確立された掟やしきたりを改変するのは並大抵ではない。特に学問の世界は、その内容の先進性から考えると滑稽なほどに旧来の権威や様式に固執しがちである。その意味において、大学の紀要をいち早く国際オンラインジャーナルへと変革させた大妻女子大学人間生活文化研究所の柔軟性と行動力には驚かされる。投稿システムはとても明快で、ユーザー目線で作られており、使いやすい。実際オンライン化以前と比較して、読者人数は100倍にも増加しており、その効果は明らかである。今後も変革と革新は続けられていくことだろう。将来の展開がとても楽しみである。

原著論文（査読有）（46編）※掲載順

高田 祐里、小林 実夏(2013)

日本人の糖質摂取量評価方法の開発、23、47-76頁。

森崎 巧一、大海 悠太、豊崎 寛樹、林原 泰子、山本 正記、川口 卓真(2013)

風を可視化するフィジカルコンピューティング作品(風色計)の開発、23、167-175頁。

鈴木 紀子(2013)

冷戦期の「文学大使」たち―戦後日米のナショナル・アイデンティティ形成における米文学の機能と文化的受容―、23、258-276頁。

壬生 尚美、神庭 直子(2013)

介護職員の仕事の満足感・やりがい感に影響を及ぼす要因―ユニット型施設と従来型施設による比較―、23、287-299頁。

井上 俊也(2014)

女子大学のキャリア教育における参謀型人材の育成、24、1-21頁。

早川 公康、小林 寛道(2014)

知的障害児の発育期における運動能力について、24、78-95頁。

張 寓杰、董 媛、太 蘭、寺井 あすか、中川 正宣(2014)

日本語と中国語における確率的言語知識構造の比較研究、24、222-233頁。

阿部 和子、柴崎 正行、阿部 栄子、是澤 博昭、坪井 瞳、加藤 紫織(2014)

近現代日本における育児行為と育児用品にみられる子育ての変化に関する一考察、24、245-264頁。

西河 正行、八城 薫、向井 敦子、古田 雅明、香月 菜々子(2015)

心理学教育を通じた社会人基礎力の育成、25、1-14頁。

酒本 光子、池上 幸江(2015)

ラットにおけるヘキサクロロベンゼンの母親体内蓄積と母乳移行に対する自由摂取飼料の脂質レベルの影響、25、142-149頁。

下田 敦子、Naing, T.、大澤 清二(2015)

児童期からの首輪装着は成熟後の形態と体構にどのような影響を及ぼすのか ―カヤン人女性の高径データの分析から―、25、272-286頁。

正村 俊之(2016)

現代的ガバナンスの形成と社会情報学的課題、26、173-189頁。

酒本 光子、池上 幸江(2016)

ラットにおけるヘキサクロロベンゼンの母親体内蓄積と母乳移行に対するpaired feedingにおける脂質レベルの影響、26、263-270頁。

宮崎 絵理、サウミヤ ニルミニ セラピラツヌ、飯島 聰、藤野 毅(2016)

日本とスリランカの都市近郊で生活する子どもたちの環境保全活動参加意欲に関する意識の分析、26、487-498頁。

中川 麻子、森田 舞、嶺野 あゆみ、浅田 晴之、前田 明洋、大澤 清二(2016)

女性が選好するオフィス環境・アメニティ空間と家具に関する研究、26、535-541頁。

山名 章二(2016)

悪感をからくも逃れて—『終わりなき日々』の結末をめぐる右往左往—、26、551-571頁。

本田 周二(2016)

友人関係における動機づけと友人とのコミュニケーションおよび精神的健康との関連、26、572-582頁。

日下部 尚徳(2016)

サイクロン常襲地域における被災後の復興課題に関する研究—バングラデシュにおける定性調査をもとにした事例研究—、26、583-594頁。

坂本 憲治、本多 千賀子、永山 由貴、木内 理恵、成田 奈緒子(2016)

専任カウンセラー不在の学生相談室の問題—開設33年目のX大学学生相談室における後向調査から—、26、595-609頁。

杉山 眞弓(2016)

Work: A Story of Experienceにおける「作家業」の不在が意味するもの、26、646-658頁。

土肥 麻佐子(2017)

衣服設計用着衣モデル生成のための基礎研究—身頃部分の検討—、27、26-32頁。

早川 洋子、大熊 慶、高橋 裕子、内海 舞香(2017)

運動様式の異なる一過性運動が中年女性の気分及び影響—ボクシングとヨガを取り入れた運動プログラムの場合—、27、39-46頁。

館井 菫(2017)

インドの教育現場におけるろう文化、27、319-336頁。

井上 源喜、川野 田寛夫(2017)

大分県日田市地域の筑後川水系における泡状物質中のバイオマーカーの地球化学的特徴、27、559-573頁。

古市 孝義(2017)

A施設における介護記録の勉強会実施前後の意識の変化、27、574-591頁。

石井 雅幸、塚本 美紀(2017)

小学校理科授業における教師の指導内容について—小学校教師向けの調査結果を分析して—、27、592-602頁。

松村 茂樹(2017)

近代のボストン美術館に見る日中米文化交流について—岡倉天心、長尾雨山そして呉昌碩の貢献—、27、603-609頁。

渡邊 万里子(2018)

児童英語教育における人間的成長の軌跡—natural discourseのインタラクション分析に基づいて—、28、20-45頁。

戸高 留美子(2018)

新学習指導要領「カリキュラム・マネジメント」と中学校漢文教材選択刷新の可能性について—複数教科連携による漢文教材の多様化—、28、552-559頁。

伊藤 みちる(2018)

旧英領カリブ海地域における白人性の多様性—バルバドスとトリニダードの比較—、28、660-695頁。

伊藤 みちる、工藤 理恵、徳増 紀子(2018)

長期的視座で捉える青年海外協力隊による日本語教育—ブルガリア・ジャマイカ・ベトナムの三学習者の事例研究—、28、752-792頁。

(英語)

Osawa, T. (2012)

A New Statistical Model and a Redefinition of Isotopic Ratio: Correction and Evaluation in Ultra-microanalysis, 22, pp. 133-146

Hayakawa K. and Kobayashi K. (2013)

Effects of training with hot spring and cognitive movement training machine for middle-aged and elderly persons, 23, pp. 310-318

Senavirathna, S.N., Wityi, H., and Fujino, T. (2014)

Community knowledge and attitude towards regional developmental requirements in remote townships of Chin state, Myanmar—A questionnaire on sustainability and subsistence to overexploitation of natural resources—, 24, pp. 25-38

Morita, Y., Oda, H., and Morita, T. (2014)

Characteristics of actions for sliding walk technique in Japanese traditional performing art—Pursuit for Rhythm of Jyo-Ha-Kyu, "introduction, development, and climax" of Hakobi (sliding walk) from proficiency difference in Kyogen actors—, 24, pp. 204-216

Ohsawa, S., Nimonjiya, S., and Shimoda, A. (2014)

Field notes on the dietary habits of the Mlabri hunter-gatherers in Thailand, 24, pp. 234-244

Vishwakarma, L.B. (2015)

Ways of changing students' behavior towards healthy school environment: Experiences from an action research, 25, pp. 25-32

Osawa, T. and Hatsukawa, Y. (2015)

Artisanal and small-scale gold mining in Myanmar: Preliminary research for environmental mercury contamination, 25, pp. 221-230

Ito, M. (2016)

The Caribbean Community Single Market and Economy: The rationale behind the obstacles and prospects for the integration of the Commonwealth Caribbean, 26, pp. 63-97

Tokizane, S. (2016)

Epistolarity of Email, 26, pp. 142-166

Ito, M. (2016)

Constructing and reproducing whiteness: An oral history of French Creoles in Trinidad, 26, pp. 613-645

Imanishi, H., Muramatsu, T. and Morita, Y. (2018)

The necessity of 'Hifumi Gymnastics' for Japanese children in physical education and recreation, 28, pp. 50-60

Tokizane, S. (2018)

What postcards want to say, 28, pp. 116-125

Ohsawa, S. and Shimoda, A. (2018)

The growth of height in early childhood determines the height of Japanese people (From the school health survey, 1900-2017), 28, pp. 493-498

Namekata, I., Hiroy, H., Kanae, H., Yoshino, A., Kazama, A., Hamaguchi, S., Iida-Tanaka, N. and Tanaka, H. (2018)

Acceleratory effect of ellagic acid on sarcoplasmic reticulum Ca^{2+} uptake and myocardial relaxation, 28, pp. 701-707

Fujioka, Y. (2018)

A single simultaneous injection of two monoclonal antibodies causes novel progressive renal lesions with characteristic proteinuria kinetics, 28, pp. 793-800

短報（査読有）（7編）※掲載順

清水 沙也加、林 恵美子、若林 綾 (2014)

近代日本文学におけるイメージと文学のかかわりについての研究、24、73-77頁。

生田 茂、葛西 美紀子 (2014)

文や文節をハイライトしながら同期をとって読み上げを行う電子書籍を用いた音読活動の取り組み、24、160-167頁。

渡邊 万里子 (2015)

児童英語教育におけるスキファールディングの前提、25、361-374頁。

工藤 陽香、山中 千恵美、青江 誠一郎 (2017)

食餌性肥満モデルマウスにおける肝臓脂質蓄積および軽度炎症に及ぼすロイシンとバリンの効果、27、140-145頁。

下田 敦子、大澤 清二 (2017)

カヤン女性の首輪による身体変工の美醜に関する計量的研究、27、610-620頁。

加藤 淳 (2018)

看護師のヒューマンエラーによる医療事故に関する事例研究、28、595-609

Shimoda, A. and Ohsawa, S. (2017)

Perception of neck ring wear using SD Method, 27, pp. 638-644

上記以外、査読なしの報告174編、資料44編。